

## 保育のクロスロード 保育は素敵な物語 (1)

### 十年後の手紙

湯澤美紀  
(大学教員)

私は、保育を専門とする大学教員です。

私の周りには、真つすぐなまなざしで子どもと向き合うことができる学生がいます。自らの保育のあり方を模索されている保育者がいます。悩み事を伝えてくれる保護者がいます。研究・実践の中にいる私が信頼を寄せられる仲間たち。私がいる場所は、さながら、子どもを真ん中にしながら、さまざまなお人たちが行き交う保育のクロスロードです。

日々の交流の中で、私は数多くの心動かされるエピソードと出会っています。そのエピソードの幾つかを、一つの物語としてまとめ

て、皆さんにお届けしたいと思います。

「保育は素敵な物語」。そう共感してくれる皆さんにこれから出会っていききたいのです。

一回目のお話は、学生が、言葉を話さない五歳の女の子きょうこちゃん(仮名)と出会ったところから始まります。一年後、きょうこちゃんは卒園の時を迎えます。きょうこちゃんの成長がテーマとなったカンファレンスの中で、学生と園長先生が思いを伝えます。そこで、ある新たなエピソードが語られます。

## 言葉を話さない、ある女の子の出会い

私が大学で行っている授業の一つに子ども観察研究があります。学生は、実際に幼稚園に通わせていただき、子どもたちを観察し、エピソードをまとめ、考察を深めていきます。その授業を受けた多くの学生は、卒業研究でも引き続き、自らのテーマをもとに観察研究を行います。私のゼミ生となった学生もそんな一人でした。

「先生、卒論の件で相談があるんですけど」  
彼女は、ゆっくり語り始めました。ボランティアで幼稚園に通う中で、気になる女の子に出会ったそうです。

「きょうこちゃん(仮名)、まったく話さないのです。私の前で。でも、お友達の前よりちゃん(仮名)の前では、陰に隠れて、ヒソヒソと話しているのです。でも、私が近づくと黙ってしまいます。最初は、嫌われているのか

なと思って落ち込んでいたんですが、実は、担任の先生も、彼女の声を聞いたことはないのだそうです。みんなの前で、ゆりちゃんと一緒にいる時、きょうこちゃんは声を出しません。そんな時でも、きょうこちゃんとゆりちゃんは互いにわかり合っているようです。それって、すごいなあって思ってます」

私は、「場面緘黙かな」と思いましたが、その言葉は口にしませんでした。学生が、障がい名ではなく、きょうこちゃんのありのままの姿を語っていたこと、そのことが、今の彼女にとっても、そして、近い将来保育者になるであろう彼女にとっても、子どもを理解する上で大切な視点だと思えたのです。

「きょうこちゃん、多分、ちゃんと育っているよ。きょうこちゃんは、きょうこちゃんの成長の姿をきくと見せてくれるから、あなたは、そこから学ばせてもらおう。しっかり心の目で観察しておいで」

学生は、ゆつくりとほほ笑み、「はい」と答えました。

### きょうこちゃんのおち

五月。学生はゼミで最近のきょうこちゃんの様子を報告しました。

「きょうこちゃん、普通にゆりちゃんのことを好きだつて、(私は)思っていたんです。でも、クラスでカエルの絵を描いていた時、『あつ、ちよつと違う』って思ったんです」

学生は、二枚の写真を示しながら続けました。

「その時、二人は並んで座つて絵を描いていました。二人の絵は全くそっくり。きょうこちゃんが、ゆりちゃんの絵をまねているようでした。『あつ』と、小さな声が聞こえた次の瞬間、ゆりちゃんの顔に戸惑いの表情が浮かびました。さつと手を動かした弾みで、カエルの下に、左から右へと横線が付いてしまつ

たようでした。すると、きょうこちゃんは、次の瞬間、自分のカエルの下の、ゆりちゃんを描いた線と全く同じ所に、すーつと線を引き、ゆりちゃんの顔を下からのぞき込んで、につこりほほ笑みました」

学生は、きょうこちゃんが、ゆりちゃんとそっくり同じものを描くことで、深い安心感を抱くことができていること、つまり、ゆりちゃんはきょうこちゃんの安全基地になっていると報告しました。きょうこちゃんの心の動きをとらえた瞬間を、学生は自分の言葉で語りました。きつとそうなのでしょう。学生の言葉は、私にもすつと入つてきました。

それから、きょうこちゃんとゆりちゃんのかかわりは緩やかに変化していきました。ゆりちゃんの提案にいつも従っていたきょうこちゃんでしたが、ゆりちゃんが「ここに座る？」と提案した時に、「ううん」と首を振つたのでした。そして冬に入るころには、こんな

変化もありました。一輪車に乗っていた二人は、そのまま鬼ごっこを始めました。ゆりちゃんにまさに捕まりかけたその時、きょうこちゃんは「きゃつきゃつきゃつ」と大きな声を出しながら、一気にゆりちゃんに顔を近づけました。感情を大きく動かし、体の動きにもそれが表れるようになってきたのも、きょうこちゃんの成長です。そして、きょうこちゃんの声を学生がはつきりと聞いたのは、それが初めてでした。

### カンファレンスで語られたそれぞれの思い

卒業論文の提出は一月ですから、おおよそ観察研究は年末で終わりました。

私の学科では、新しい取り組みとして、学生たちが現場で得た子どもを中心としたエピソードを、実際に現場の先生に聞いていただき、語り合うといったカンファレンスを実施しています。三月に入り、私は、学生から見

たきょうこちゃんの成長を先生方にお伝えするいい時期ととらえ、きょうこちゃんの園でのカンファレンスを計画し、学生に声を掛けました。カンファレンスには、園の先生方、学生数名に加え、私、本学教員の梶谷恵子先生、そして、Y先生が参加しました。Y先生は公立の園長先生をご経験の後、私の大学で学生支援のスタッフとして働いてくださっている、物腰の柔らかな、ほほ笑みの温かい先生です。ただ、いつもそうなのですが、ご自身からなかなか語り始められることは少ない、やや控え目な一面があります。

学生は、彼女の目で見たきょうこちゃんの成長の姿を伝えました。そして、ボランティアで幼稚園に引き続き通い続ける中で、きょうこちゃんはゆりちゃんとのヒソヒソ話に夢中で、学生が近くにいても、そのまま話し続けることがあったことをうれしそうに語りました。学生は、きょうこちゃんが「ついうっ

かり話しちゃっていた」といった出来事がこれから増えていけばいいな、そんな願いを語りました。

園長先生は、最後まで話を聞いてくださり、きょうこちゃんの年少のころの姿を伝えてくださいました。きょうこちゃんの緊張は今よりもっと強く、保育室さえ入れなかったこと。

そして、少しずつ、園長先生が補助としてクラスに入る中で、保育室には入れるようになったこと。しかし、みんなで輪になって座るにはさらに時間を要したことを話されました。

「保育室の真ん中に椅子を並べ、大きな輪を作ってみんなが座る時、私、きょうこちゃんと、ひもでつながっていたんです」

園長先生の言葉に、「どういうことですか？」と、私は尋ねました。

「長いひもをきょうこちゃんに持たせ、私はその端っこを握って、少しずつ、きょうこち

ゃんと私との距離を伸ばしていったんです」私の心に、保育室の椅子に緊張しながら座るきょうこちゃんの姿と、その後ろに座り、きょうこちゃんの背中に応援のまなざしを向けていた園長先生の姿が鮮やかに浮かびました。園長先生はきょうこちゃんのことをずっと見てこられていたのです。

そして、園長先生が今のきょうこちゃんを語り始めました。

「ちようど、卒園式の練習が始まっています。卒園式では、私が一人一人子どもの名前を呼び、子どもは『はい』と答え、卒園証書を受け取ります」

一息ついて、続けます。

「きょうこちゃんに、返事を頑張ってほしいな、と思って、親御さんにも相談して、この前、きょうこちゃんにそのお話をしたんです。『名前を呼んだら、はいつて言えるかな?』

困った表情を浮かべていました。でも、彼女はうなずきました。そして、昨日、二回目の練習が終わって」

「どうだったんですか？」私は思わず、尋ねました。

「一回目、私が名前を呼んだ時、なかなか『はい』って言えなかったので、『言ってごらん』って小さく伝えたら、『うわー』と泣いてしまつて、しばらく泣きやむことができなかったんです。その失敗体験で終わらせたくないと思つた二回目。ただ、待ちました。時間はかかりましたが、口が小さく動きました。『はい』。声にならない口の動きを見ることができました」

私は、きゅつと心臓が縮んだ思いがしました。そして、「きょうこちゃんは、みんなの前で言葉を出したいのかな」、その言葉はのみ込みました。長きにわたつてきょうこちゃんを

見てきた園長先生です。ここは、きょうこちゃんの背中を押すタイミングなのかもしれませぬ。

### 十年後の手紙

しばらくの沈黙の後、Y先生がぼつりぼつりと語り始めました。

「私ね、一人の教え子のことを思い出しました」

みんなは、それぞれの思いを胸に、Y先生にまなざしを向けます。

「私が昔、受け持つた子どもは、もつと話さなかつたんです。園で誰かと話すことはなかつたの。しかも、私が視線を向けただけで、緊張がこちらにも伝わってくるほどでした。気になつて、夕方、その子の家の近所まで行き、外から家の様子をそつとうかがつてみました。すると、その子の家から笑い声が聞こえてきてね。声のする庭を見ると、妹さんと、

まさに園ではやっているおままだとをしていたんです。『あつ、この子はちゃんとお友達の様子を見ているんだわ』。安心した瞬間でした。それから、私は彼女に気付かれないよう、園での彼女の様子を見ていました。すると、他のお友達が遊んでいる時、その子は、よく見ているんですよ。『ちゃんと、学んでる』。そう信じ、私はその子を見守っていきました。もちろん、卒園式でも一言も声を出さないうまま卒園していきました」

Y先生のお話は、ゆつくり続いていきます。「それがね、十年後のこと、私は二つほど園を変わっていましたが、そこに、一つの封筒が届けられたのです。十七歳になったその子からの手紙でした」

十七歳とはいえ、先生が異動した先の園を探し、そこに手紙を書いて届けるといった行為にどれほど大きな決意が潜んでいるか。その十年後の手紙は、Y先生の記憶の引き出し

から取り出され、先生の温かく、そしてゆつくりとした声でみんなの耳に届けられました。

「私は十七歳になりました。まだ、人との付き合い合いは、得意とは言えません。でも、人前で、少しですがお話しできるようにになりました。友達の数も多くはありませんが、心から信頼できる親友もできました。私、Y先生にお礼が言いたいんです。先生は、私が幼稚園の時、一度も、私に向かって『話しなさい』と言われたことはありませんでした。そのかわりに温かく見守ってくださいました。そのことに、『ありがとう』という気持ちも、ずっと伝えたかったです」

静かな時間が、流れました。十年後の手紙が伝えてくれることは何か。それぞれが、きょうこちゃんの今の姿を思い浮かべながら、一つの宿題として持ち帰りました。